



君

と

雨

に

ロビン  
ツクス

亜鐘 芽生

外はバケツをひっくりかえしたような雨。その雨音がうるさすぎて、先生の声すらきこえない授業中。 桃香は窓の外を見てタメ息をつく。

佐野桃香。髪質がひどいクセっ毛で、とくに雨の日なんかは髪がものすごくひろがってしまう。とかしてもとかしても、ボサボサだ。

その日は結局雨もやまず、放課後になっても土砂降りだった。

「傘、忘れちゃった...朝は晴れてたのに...」

桃香がつぶやき、玄関で一人立ち尽くす。

「桃香っ、何その頭！ 家でるとき髪とかさなかったのかよ。寝坊でもしたのか？」

桃香より少し遅れてやってきた文哉が桃香の髪をみてアハハハッと笑う。

桃香の幼馴染である中森文哉は、二人が幼稚園だったころから仲良しで、家の事情で中学のときに引っ越したが、そこまで遠くに行ったわけでもなく、高校でこうしてまた一緒になったのだ。

そして桃香は一...文哉に思いをよせていた。

こうして桃香をからかっているものの、文哉はわりと気配りができて優しく、運動神経もなかなか。おまけに顔立ちまでも整っているのが女子の中にはファンが何人かいるのだ。

「うるさいな」

「はいはい。で、どーせお前は傘忘れてんだろ？ 毎回そうだもんなー。俺は今日オリタタミしかもってないから狭いけど、駅までならおくってやるよ」

「いいよ別に。大した距離じゃないから走ってくし。人に見られたら変な風に思われるじゃん」

文哉と相合傘。本音をいえば桃香はもちろん文哉を並んで帰りたかったが、文哉ファンの女子から反感を買うのもいやだ。ただでさえ、この幼馴染という立場だけで、目をつけられているのだから。そして何よりも、この頭をずっと文哉に見られるのもいやだ。

「だからはやく帰りなよ。私、ちょっと先生に用事あったしさ。鞆でも頭にのして走れば全然だし」

お願いだからはやく行ってよ！ もうこの髪をみられたくないの!!

「はぁ？ 何いってんだよ、人に見られたってさ、実際んところ別にそういう関係じゃねーんだし。見たやつ勝手な勘違い、ってことで。いいだろ、エンリョすんなって、はいってけよ」

「だからいいってば。私ほんとに先生に用事あるし職員室行くし。じゃね！ また明日」

そうやって職員室方向に歩き出す桃香。

一用事なんかなくせに...私って、バカみたいー。

一雨なんか嫌いだ。雨も、自分の髪も大っ嫌いだー....。

職員室前につき、しばらく立ち尽くす。そろそろ良いかな、と玄関へUターン。いい加減文哉も帰ってるだろう、と。

そう思ったのに、まだ玄関にだれがいる。部活が終わった人だろうか。ここからじゃ、影がぼ

んやりみえる程度で顔はわからないけど、さすがに文哉ではないだろう、と桃香は気にせず歩いた一が。

案の定をいうかなんというか、そのだれかはやっぱり文哉だった。

「おお！ やっと来たかよーおそいつての」

文哉が笑う。

その、笑顔の文哉に桃香は怒った。

「なんでいるの!？」

突然の桃香の大声に文哉はビク、としながら答える。

「どうしたんだよ急に大声だして。なんでって、お前がカサ持ってないから一緒に帰ろうと...」

「いいっていつてるじゃんか！」

「だからどうしたんだよ。何、急にムキに...」

「いいからもう帰ってよ！」

ポタ、と床にシズクが落ちる。雨ではない。

そう、桃香の涙だった。

「あ...」

文哉はどうすればいいかわからずに、ただ目を逸らした。

「...なんだよ」

しばらくし、文哉がつぶやく。

「なんなんだよ...！ 何がそんなに嫌なんだよ...お前は、そんなに俺のことが嫌いなのかよ...！」

涙目の桃香も

「そんなこと言っていないじゃん！ ムキになってるのはそっちでしょ!? いい加減にしてよ！」

と言い返す。

「だったら、なんでだよ...！ 俺は、桃香と帰りたい！ 桃香のことが好きだから!! なのになんで...」

桃香はハッとした。文哉の言葉を反芻する。

好きー...？ 文哉が...私を...？

「...文...哉？」

桃香の顔がボツと真っ赤になる。

「...あ...」

つられ、文哉の顔も同じように。

そして

「待っ...」

文哉は、オリタタミ傘を置いて、走り出してしまった。

まだ止まない土砂降り。一人玄関に残された桃香は、足元に投げられた、文哉の黒いオリタタミ傘を拾い、ポンと開いた。雨の中を一人で歩き出しながら、

明日、傘をかえすときに返事をしよう。私も好きだって言おう。

と、そう決心した。

—ああ、やっぱり雨は嫌いだ。